【門徒Q&A】今様とは

平安中期から鎌倉時代にかけて流行した、多く七五調からなる様式の歌謡。一般的に現代風と云うほどの意味で、当時庶民の間で大流行していた俗謡。民謡ではなく、今日風に云うところの、ポピュラーソングに近いと言えます。今様のなかには様々な種類の歌詞のものがあり、平安時代における当時においては多くの天皇たちも愛好していたと言われています。

仏教と音楽のつながりは深く、お釈迦様が亡くなられて後、仏典結集が行われましたが、結集とはサンスクリット語で「ともに歌う」との意。比丘（びく）が集まってお釈迦様の教えを読誦し、お互いの意を確信しながら仏典は編纂されました。もともと教えは口伝で覚えやすいように韻を踏むなど工夫がされていました。

五木先生は『親鸞 激動編』の中でも、多くの歌を親鸞にうたわせていて、歌をとても重要なものだと位置づけています。今様というキーワードでお話されたのも、歌という観点から「現代では、世代を越えて口ずさめる心に沁み入る日本人の歌と言える歌が無くなってしまい、日本人の心は渇いてしまっているのではないか？」と現代を慮る気持ちによるものではないかと思います。

【門徒Q&A】本願とは

仏が菩薩の時におこした願い、とりわけ阿弥陀仏のおこした誓願を云い、他力本願と云いますが、私たち人間にかけられた願いで、私たちを目覚ましめてやまない働きです。本願と云われてもピンとこない方も多いと思いますが、自らの身勝手な願いではなく、いのちそのものの深くにあるものです。「真実にめざめていきたいという私たち人間が気づかないところにはたらく願い」と云ってもいいでしょう。あえて他力というのは悩み、欲望のおおい人間にはおこすことの出来ないので〝他力本願〟と云います。その本願に目覚めさせて頂くために教えを聞いていくのが浄土真宗という道であるといえます。

ホームページでも報恩講の写真が見られます！　http://sairaiji.com

西来寺報

二〇一三年　冬
第十二号

報恩講を終えて

さる10月28日に西来寺の報恩講を厳修しました。宗祖親鸞聖人は1262年11月28日にその御生涯を終えられました。宗祖が果たされたお仕事の大切さを讃え、その恩徳に感謝し報いるためのお勤めが報恩講です。恩に報いるとはひとえに信心を得て下さいという宗祖の願いに応えることです。

本山では11月21日～28日までの間、七日間報恩講がつとまります。それに先立って、あるいはその後に全国の真宗寺院で報恩講がつとまります。

本年は特別企画として五木寛之氏をお迎えし、お話して頂きました。おかげさまで当日は天気も良く、門徒さん及び抽選で当選した一般の方々あわせて900人ちかくの来場で、本堂と本堂前の境内は満席の入場となり、無事終えることが出来ました。五木氏の講演もさることながら、報恩講当日の儀式もはじめて見る方が多かったそうです。門徒さん以外の人も多くみえ、お寺でこんなことをしているんだという声も聞かれました。今回の報恩講が真宗の人のみならず、多くの方に宗教への関心を持っていただけた報恩講になったのではないでしょうか。

尚、今回の報恩講にあたり、ご尽力なされたスタッフ等、関係者に改めて感謝の意を表します。

除夜の鐘の打鐘

日時　12月31日（大晦日）
夜11時45分より

西来寺梵鐘（ぼんしょう）は横須賀市内に残る最古の梵鐘で、市民文化資産に指定されています。みなさんでついて、新しい年を迎えましょう。

遠くの方から新年を祝う花火の音や船の汽笛の音が聴こえ、心静かなひとときを過ごすことができます。

是非ご参加ください。

報告 平成25年 報恩講

特別企画 五木寛之先生 講演

平成25年度報恩講、特別企画として作家の五木寛之先生をお招きして、講演をしていただきました。講題は『親鸞聖人の情（こころ）』。五木寛之先生は『親鸞』完結編を東京新聞をはじめ全国39紙の新聞にて連載中で、連載執筆中にそのテーマである親鸞について講演していただけるということは、極めて貴重な機会でした。

10月28日報恩講当日、立て続けに来ていた台風も無事過ぎ去り、気持ちの良い秋日和。もし、台風がちょうど来ていたらと思うと、よりいっそう太陽が眩しく思える、嬉しいくらいの晴天になりました。

報恩講にあたり、五木先生が『親鸞 試読本』を500冊寄贈してくださり、急遽、聴講者に先着順でプレゼントすることになりました。試読本を手にした多くの方が、講演前の空き時間に熱心に読んでいる姿が印象的でした。

講演が開始されると、演台に立った五木先生は本堂だけではなく、境内一面に張られたテントと、そこにいる多くの人に驚き、喜んでくださった様子で、明るい雰囲気で講演に入りました。90分におよぶ講演は内容も分りやすく、終始暖かい言葉で話して下さいました。「10年後またこうしてみなさんの前でお話ししたいです。心からそう思います」そう五木先生が講演を締めくくると、本堂は割れんばかりの拍手に包まれました。先生が退出しても鳴り止まない拍手は10年後の再会を約束するようでした。

本堂で講演する五木寛之先生
和やかな雰囲気の中、９０分あまりの講演をしてくださいました。

親鸞聖人の情（こころ） 要旨

今様と呼ばれる流行歌の最盛期、混沌とした時代のなか親鸞聖人は生まれ育った。親鸞聖人は数多くの和讃を残したが、それは多くの人に愛され歌ってもらいたいという想いから、今様と同じ様式を選んでいる。仏教は音楽とともにスタートし、論ではなく詩として人に沁み込むように伝わった。親鸞聖人の残した和讃も、文字として読むのではなく、声に出して、多くの御同門たちと共に歌うことで「親鸞聖人の情」は私たちの中に伝わってくるのだ。

五木先生の現地付き人をして

村瀬 明久

横須賀駅～西来寺間の送迎、現地付き人を任された。

「そんな大役を私が？」という思いも「お願いします」という坊守の声に後押しされ、「親鸞」を読んでファンになっていたので、引き受けてしまった。

引き受けてみたものの講演会のポスターが各所で掲示されているのを目にし、参加希望が殺到しているとの噂を耳にしては、日増しに心配がつのった。

講演を熱望されている方々の気持ちを、直接先生に伝えることが出来る立場に居るのが私であり、みなさんの気持ちをなんとか伝えなければいけないと感じたからだ。

そのような気持ちで臨んだ当日、お会いした先生はこちらの緊張を察してか始終気さくに接してくれた。タクシーの中では、横須賀のこと、会場の状況など質問された。御年81歳「親鸞完結編」執筆活動の身でもあり、単身横須賀まで来られ、単身東京まで帰られることを近親の方は心配してはいないのかと思った。

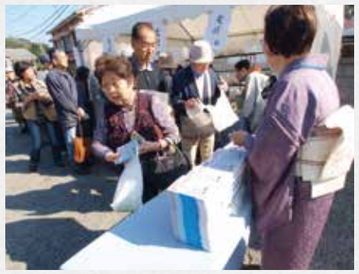
驚いたのはグリーン車のない4両編成でも、「来た電車に乗って帰ります」ときっぱり言われたこと。タクシーで送ると声をかければ「それじゃあ」となるものだが、庶民の現況を垣間見て、思いふけるために、「単身」「電車」で行動されているのだろう。その姿からは知欲旺盛で執筆への情熱が溢れているのだと感じられた。

終始作家本人と気付かれないよう振る舞われていたが帰りの電車が動き出した時、笑顔で大きく手を降っていただいた。

感激でした！

講演が終わり大きな拍手
また開催してほしいという沢山の声がありました。

五木寛之先生到着



『試読本 親鸞』
突然ののプレゼントにみなさん大喜びでした。

報恩講の朝

本堂でやるということ

「本堂でやりたいんですよね？」お世話人さんが私に念を押すように問いかけた。

何せ五木先生が来て下さるのである。どう考えたって普通はホールの貸し切りが当然であろう。

しかし私はホールという冷たく乾ききったコンクリートの箱ではなく、今なお息づく木で出来た、何百年もの間人々の祈りの染みこんだ本堂でやりたかったのだ。

本堂でやる――それは同時に予想される様々な困難を意味していた。本堂に入りきれるのか？　境内を開放した場合、雨が降ったらどうするか？　風が強かったらどうするか？　音響はどうするか？　トイレは足りるのか？　様々ことが想定され、問題は山積みだった。スタッフの方々は毎日忙しい仕事をしながら、想定される全てのことを一つ一つ描き、対策案を出していって下さった。

そして、実際にやってきた台風。それもふたつ――はやく通り過ぎてくれと願いながら毎朝速度の遅い台風を伝える天気予報を見た。――台風は去り空は晴れ上がる。

報恩講当日、法要が終わり、西来寺の本堂に五木先生の姿。五木先生の威厳がありながらも温かい講演に皆聞き入った。人々に語りかけるその姿は正に親鸞聖人を彷彿とさせるものですらあった。

終了後、本当に多くの人から温かい言葉を頂いた。本堂でやるということが実現できたのも、皆様からお言葉を頂けたのも、すべて支えてくれたスタッフの方々のおかげであり、かけがえのないスタッフの皆様にはどれだけ御礼を言っても言い足りない。ただただ感謝するのみである。

スタッフの皆様、聴講に来てくださった皆様、そして五木先生、本当に有り難うございました！